

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 7日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530987

研究課題名（和文）

アメリカ合衆国における社会科グローバル学習論の展開

研究課題名（英文）

DEVELOPMENT OF GLOBAL STUDIES OF SOCIAL STUDIES EDUCATION IN THE UNITED STATES

研究代表者

鴛原 進 (OSHIHARA SUSUMU)

愛媛大学・教育学部・准教授

研究者番号：30335880

研究成果の概要（和文）：

アメリカ合衆国における社会科グローバル学習の実践的側面と理論的側面を学習論の視点からその展開を体系的に明らかにすることを目的とする。実践的側面は、カリキュラムや授業の構成やその考え方を指し、理論的側面は、実践的側面を支える提唱者の教育思想や教育論を指す。それらを、時間軸、空間軸、社会軸を駆使しながら、学習論の観点から類型化し、それらの展開の体系的、系統的な解明をはかった。

研究成果の概要（英文）：

This research analyzed the theory and practice of global studies of social studies education in the United States. In particular, I focused on development of theories and practices of global studies. I used 3 concepts "Time", "Space", "Society" in systematic classification of global studies of social studies education.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：教育学・社会科教育・グローバル学習

### 1. 研究開始当初の背景

第一に、社会科グローバル学習としてのカリキュラム・実践収集及び分析の不足を指摘できる。

本研究には、日本において実践されている「社会科グローバル学習」を正当に評価できるものにしたいという意図がある。日本における社会科系教科において、グローバル社会を題材とした学習やグローバルな市民の育成を主眼とした学習はなされてきた。しかし、

それらを位置付ける「グローバル学習」という枠組みが明確でないため、それらのカリキュラムや実践は、本来の評価を得られることができなかった。また、社会認識教育としてなされた実践やカリキュラム編成も、国際理解教育やグローバル教育という枠組みで説明されてきた。それは、必ずしも社会認識教育の原則と一致しないため、正当な評価を得られるものではなかった。

第二には、日本の近未来像としてのアメリ

カ合衆国における社会科グローバル学習と  
言う側面を指摘できる。

本研究には、近未来の日本の鏡としてアメリカ合衆国を位置付け、その社会科グローバル学習から示唆をえるという意図がある。日本においても、経済や政治をはじめ様々な分野においてグローバル社会の影響を受けている。また、国内においても多民族化や多文化化が進展し、グローバル社会化している。日本の先行地をアメリカ合衆国とし、さらに、そこでの先行的な社会科グローバル学習を、まず思想・教育論・学習論・カリキュラム論など体系的に明らかにし、その系統的な展開を解明したい。そして、日本内外での将来を担う次世代の育成の方途に示唆をえたい。

第三には、社会認識教育論の視点からアメリカ合衆国における社会科グローバル学習を研究している永井滋郎氏、今谷順重氏、金子邦秀氏、中村哲氏、藤原孝章氏らの先行研究、グローバル教育の視点からそれを研究している魚住忠久氏、石坂和夫氏、加藤幸次氏、大津和子氏らの先行研究、申請者が行った一連の研究、そして、平成 15 年度科学研究費補助金をえて行った「アメリカ合衆国における社会科科目「世界文化」の成立・展開に関する研究」での成果を吟味していくと、アメリカ合衆国における社会科グローバル学習のカリキュラムや実践は確かに存在し、それを紹介することはなされてきた。しかし、それらを説明する、特に、学習論（なぜグローバルなのか、地理学習や歴史学習、公民学習等との違いは何か、）の解明が十分なされていないことが判明した。

## 2. 研究の目的

アメリカ合衆国における社会科グローバル学習のカリキュラム・単元等の授業、提唱者の著作等を日米両国内において再整理する。日本国内に紹介されていないものを米国にて収集する。また、各カリキュラム・単元の提唱者等へは聞き取り調査を実施し、その教育思想等をインタビュー調査結果として収集する。その収集したものを、学習論の視点から、分析し、類型化し、アメリカ合衆国における社会科グローバル学習の実践と理論の展開を体系的に明らかにする。それらを国内外の学会等で報告し、批判に耐えうるものにしていき、社会科グローバル学習論の展開の体系的な解明をより明確にし、世に問う。

アメリカ合衆国における社会科グローバル学習に関して、グローバル教育論から収集、紹介、分析されてきた。国際理解教育とは異なる、あるいは同様な教育論のアンブレラ概念としてグローバル教育に注目し、それらにあたるカリキュラムや授業実践、その学習論や教育論を収集、紹介、分析してきた。この研究は、当時の日本にはなかった教育論や潮

流、その実践的側面を紹介し、知らしめたという点では評価できる。一方、紹介されたものの多くは社会認識教育のそれでありながら、その原則に基づく分析になっておらず、社会認識教育としての位置付けがなされなかった。

そのため、社会科グローバル学習へは、社会認識教育でありながら、その枠組みでは説明されてこなかった。よく位置付けても、「周辺」「社会科関連教育」というものであった。グローバル社会論やシティズンシップ論、国際関係論などに関する社会諸科学が発展している今、これらの手法を参考にしながら、社会認識教育の中に「正当に」位置付けるための、枠組みを提示する必要がある。

アメリカ合衆国における社会科グローバル学習の体系的収集、類型と系統的展開の必要性のためにも、多くのカリキュラムや授業実践の蓄積のあるアメリカ合衆国における社会科グローバル学習をなるべく多く収集し、それを分析し類型化することで、社会科グローバル学習の枠組みが明らかとなると考える。そして、アメリカ合衆国における社会科グローバル学習論の展開から日本の社会科グローバル学習に示唆をえる視点を抽出できると考える。

## 3. 研究の方法

平成 22 年度は次のことを行う。

(1) 社会認識教育論の視点からのアメリカ合衆国における社会科グローバル学習に対する先行研究、グローバル教育の視点から先行研究、申請者の先行研究を吟味する。

(2) アメリカ合衆国における社会科グローバル学習のカリキュラム・単元等の授業の収集、提唱者等の著作等の収集と聞き取り調査を、日米両国内において収集する。

平成 23～24 年度は次のことを行う。

(3) 収集した実践的側面、理論的側面の分析、類型化、アメリカ合衆国における社会科グローバル学習論の展開を明らかにする。

(4) 国内外の学会等での報告と系統的な展開の解明を世に問う。

## 4. 研究成果

平成 22 年度は、(1) 社会認識教育論の視点からのアメリカ合衆国における社会科グローバル学習に対する先行研究、グローバル教育の視点から先行研究、申請者の先行研究を吟味すること、(2) アメリカ合衆国における社会科グローバル学習のカリキュラム・単元等の授業の収集、提唱者等の著作等の収集と聞き取り調査を、日米両国内において収集すること、を行った。

(1) については、社会科教育とグローバル教育の関係を中心に吟味し、両者における重なりが社会科グローバル学習として結実し

ていることを明らかにできた。(2)の日本国内での収集においては、永井滋郎氏、魚住忠久氏、今谷順重氏、金子邦秀氏などの著作と、収集されていたアメリカ合衆国社会科グローバル学習のカリキュラム・単元等やそれらに関する文献を収集することができた。(2)のアメリカ合衆国内での収集においては、ベッカー(James M. Becker)、ケンライヒ(Todd W. Kenreich)、メリーフィールド(Merry M. Merryfield)、メイヤー(John Myers)、パーカー(Walter C. Parker)などの著作と、収集されていたアメリカ合衆国社会科グローバル学習のカリキュラム・単元等やそれらに関する文献を収集することができた。(2)の聞き取り調査では、バートン(Keith C. Barton)、ケンライヒ、メリーフィールド、パーカー、ソーントン(Stephen J. Thornton)などから聞き取り調査をすることができた。

平成 23 年度は、(1)アメリカ合衆国におけるグローバル教育の視点からの先行研究の整理、(2)アメリカ合衆国における社会科グローバル学習のカリキュラム・単元等の授業の収集、提唱者等の著作等の収集と聞き取り調査を、日米両国内において収集すること、(3)収集した実践的側面、理論的側面の分析、類型化、アメリカ合衆国における社会科グローバル学習論の展開を明らかにすること、(4)アメリカ合衆国の学会で報告をすることの 4 点を行った。

(1)について、アメリカ合衆国におけるグローバル教育の歴史的展開を再確認し、公的カリキュラムへのグローバル教育の影響に関する部分の研究が必要であることを明らかにできた。(2)について、2 回カリフォルニア州の州都サクラメント市を訪問し、過去の同州社会科フレームワーク、郡、学区レベルの公的カリキュラムを収集するとともに、複数の学校を訪問し、社会科グローバル学習の授業を観察し、その実態を調査することができた。(3)について、(2)の収集と聞き取りとの関連で、ケンライヒ、メイヤー、パーカーなどと、アメリカ合衆国のグローバル学習の歴史について研究成果を交流し、歴史的に位置づけた。(4)について、The 91st National Council for The Social Studies Annual Conference, College and University Faculty Assembly にて、Global Education in the East and West: Perspectives from Japan and the United States - An Intellectual History of Global Education in Japan-と題した報告を行った。

平成 24 年度は、国内の学会等での報告などを通して、収集した実践的側面、理論的側面の分析、類型化、アメリカ合衆国における社会科グローバル学習の展開の解明につとめることを行った。

学会報告では、「1970 年代米国において提唱されたグローバル教育とその学習論 -

James M. Becker のグローバル教育論の再検討-」(日本グローバル教育学会)、「アメリカ合衆国におけるグローバル教育の進展と NCSS の対応」(日本社会科教育学会)、「米国におけるグローバル教育提唱以前の世界に関する学習論」(全国社会科教育学会)を行った。

これら 3 カ年の研究を通して次のことが言えよう。アメリカ合衆国における社会科グローバル学習は、大きく 3 つの展開を経ている。成り立ちは、世界を中心に据えた教育(World-Centered Education)を提唱し、容の観点として、「世界中心」、「世界情勢または外交政策研究」、「世界文化または地域学習」の 3 つを提示している。そして、アメリカ合衆国内における身近な地域にひそむグローバルな内容を取り上げるものであった。展開期には、反省的探究を重視している社会科教育論、あるいは、その教育論者は、その社会科を充実させる可能性を保持しているグローバル教育にアプローチしていったと考えられる。グローバル教育は、社会科として取り上げる社会問題も単純に空間拡大するのではなく、重層構造を持ったものとなる学習を可能にした。最近においては、アメリカ合衆国内における多様性と統一性の止揚するものとして、グローバル学習論が位置づいている。

また、シンガポールにおけるアメリカ合衆国社会科グローバル学習論の影響に関する調査を行うことができた。日本のみならずアジアの多くの社会認識教育はアメリカ合衆国のその影響を受けている。そのような国際関係における影響と受容の関係から、アメリカ合衆国社会科グローバル学習論の展開の体系化に迫るといふ新たな課題が発見できた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 9 件)

- ① 鴛原 進, 3 つのレベルと研究テーマ, 社会科教育, 査読無, 648 号, 2013, 102
- ② 鴛原 進, アメリカ合衆国におけるグローバル教育の進展と NCSS の対応, 日本社会科教育学会発表論文集, 査読無, 8 巻, 2012, 77-78
- ③ 鴛原 進, 愛媛=世界とつながるモノ・ヒト・コト, 社会科教育, 査読無, 642 号, 2012, 56
- ④ 鴛原 進, ニュースを身近にする時事問題の取り上げ方: 中学, 社会科教育, 査読無, 627 号, 2011, 69-71
- ⑤ 空野 剛, 鴛原 進, 高等学校「公民」

現代社会における情報教育の展開について —「世論形成と政治参加」の授業開発を通して—, 愛媛大学教育学部紀要, 58巻, 2011, 73-80

- ⑥ Greg Tabios PAWILEN, Manabu SUMIDA, Susumu OSHIHARA 外 (全 11 人, 10 番目) 外, Sharing a Culture of Excellence in Teaching across Borders: An Evaluation of Ehime University Students Teachers Practice Teaching in the Philippines, 愛媛大学教育実践総合センター紀要, 査読無, 29号, 2011, 55-67
- ⑦ 隅田学, 深田昭三, 菅谷成子, 池野修, 鴛原 進, 外 (全 18 人, 5 番目), 愛媛大学における海外教育実習プログラムの開発と実践, 大学教育実践ジャーナル, 査読有, 9号, 2011, 65-73
- ⑧ 鴛原 進, 社会科における異文化理解学習への教師のスタンス, 社会科教室, 査読無, 2011, 8-11
- ⑨ 鴛原 進, ロサンゼルス —「日本人」の教育, 特に近年の日本人補習授業校を中心に—, 世界の都市 —その歴史と文化—, 査読無, 8巻, 2010, 27-32

[学会発表] (計 9 件)

- ① 鴛原 進, 米国におけるグローバル教育提唱以前の世界に関する学習論, 全国社会科教育学会, 2012年10月20日, 岐阜大学
- ② 鴛原 進, アメリカ合衆国におけるグローバル教育の進展と NCSS の対応, 日本社会科教育学会, 2012年09月29日, 東京学芸大学
- ③ 鴛原 進, 1970年代米国において提唱されたグローバル教育とその学習論 — James M. Becker のグローバル教
- ④ 育論の再検討—, 日本グローバル教育学会, 2012年09月08日, 同志社女子大学
- ⑤ Susumu OSHIHARA, Global Education in the East and West: Perspectives from Japan and the United States — An Intellectual History of Global Education in Japan —, The 91st National Council for The Social Studies Annual Conference, College and University Faculty Assembly(CUFA), 2011年12月1日, Walter E. Washington Convention Center, Washington D.C., USA
- ⑥ 鴛原 進, 米国新社会科時代の「世界学習」 —ペンシルヴェニア州アピングトン学区高校用「世界文化」カリキュラム(1962年)を事例として—, 全国社会科教育学会, 2010年10月30日, 同志社大学
- ⑦ 鴛原 進, シンポジウム: グローバル社会時代の学校づくりと教師の教育実践力

—「学校づくり支援の立場から」考える—, 日本グローバル教育学会, 2010年09月11日, 鳴門教育大学

- ⑧ 鴛原 進, 米国における社会科教育とグローバル教育の関係 —両者の学習論を中心に—, 日本グローバル教育学会, 2010年09月11日, 鳴門教育大学
- ⑨ 鴛原 進, 人・社会・自然を一体的に扱う「国際理解学習」による生活科授業の再構築, 日本生活科・総合的学習教育学会, 2010年06月26日, 立命館小学校

[図書] (計 4 件)

- ① 日本公民教育学会 (編), 第一学習社, テキストブック公民教育, 2013, 18 (コラム: アメリカの公民教育), 92-95 (「世界平和と人類の福祉の増大」に関する学習)
- ② 日本社会科教育学会 (編), ぎょうせい, 新版 社会科教育事典, 2012, 320-321 (グローバル化の進展)
- ③ 社会認識教育学会 (編), 明治図書, 新 社会科教育学ハンドブック, 2012, 290-297 (社会科歴史と歴史科との違いは何か)
- ④ 大杉昭英 (編), 明治図書, 中学校新社会科歴史の実践課題に応える授業デザイン, 2011, 10-25 (歴史的分野で知識・技能を活用するとは, 実践課題への対応方法 — 4つのポイント—)

[その他]

ホームページ等  
なし

## 6. 研究組織

- (1) 研究代表者  
鴛原 進 (OSHIHARA SUSUMU)  
愛媛大学・教育学部・准教授  
研究者番号: 30335880
- (2) 研究分担者  
なし
- (3) 連携研究者  
なし